

画家 鳥越一輝

田川市美術館学芸員 原田歩夢

福岡で働きながら、画家としても活躍する鳥越一輝。

彼は幼少の頃に絵を褒められたことがきっかけで絵を描き始めたという。そうして今日までただひたすらに絵を描き続けた結果、大胆な筆致や絵の具の弾きに調和するかのよう、柔らかな色彩が画面全体を包み込む偶然の美しさを一枚の作品に描き出す、唯一無二の作風を生み出したのである。

私が初めて彼の作品を目の当たりにしたのは、田川市美術館で開催している公募展「タガワアートビエンナーレ「英展」」の審査会場である。少し埃っぽく見える作品に描かれているのは、画面からはみ出すほど大きく描かれた人物の顔であった。遠くからでも目立つその作品は、審査員の目にも留まったようで、最終審査の場にも堂々とした姿で居座っていた。《FACE》と題された作品は大賞を受賞することとなり、第1回目の公募展の展示会場で華々しく輝いていた。力強く存在感溢れるこの作品を見て、私はこの作品を描く人は、気力旺盛な大柄な男性と勝手に人物像を作り上げていた。しかし、実際に会場に現れたのは気の優しそうな姿と声の彼でイメージの相違に驚いたのを覚えている。その後のギャラリートークで自身の作品と想いを語る姿をみて、彼の中には身体には収まりきらない思いや思考が一杯に詰まっていた、それを吐き出す先がキャンバスであり、絵であり、《FACE》であったということを感じた。

彼の作品の魅力は作家自身の言葉にできない感情が、直接脳を、身体を、手を伝い、そして画面上に奔流のような勢いそのまま描かれているところである。その流れに流されることのないよう抗い描き続け、作家と作品が一つになったときに作品は完成する。そしてキャンバスに流れて溜まった感情の渦が一つの物語としてストーリー性を生み出し、さらに深みのある作品へと変貌する。言葉にするには難しい、人間の芯にある本質的な部分が彼の作品には滲み出ている。「静」と「動」が絶妙に調和し輝く作品の数々は、まるで宇宙を彷彿させ、広大な世界観とエネルギーの広がりによって圧倒される。

そんな彼が新たに大きな一歩を踏み出す。これまでの経験、そして自身を取り巻く環境や、同世代で活躍する作家との交流から、自身を俯瞰して見つめ、これからすべきことを見つけ動き出したのである。その結果生まれたのが本展の開催だ。彼の思いは、本展のタイトル「DO CHANGE with ART インテリアアートなんて言葉はクソ喰らえ！アートはアートだ！」この言葉たちにすべて込められている。彼と話しをする中で、「人に左右される人生ではなく、自分で考え意思を持って動いていきたい。悩み、もがきながら歩いて行く姿を見てほしい」と語る心情を聞き、彼の作品はこれから更に大きく変化していくと感じた。これから彼が歩いていく道は消して楽な道ではないだろうが、これからの彼の人生に無限の可能性が広がっていくように、無限の可能性に満ちた作品を生み出していくことであろう。

彼の見つめる先には日本を超えて世界が見えている。彼の新たなスタートと、これからの活躍を今後も期待したい。